

# まざあ・ぐうす

北原白秋訳

青空文庫





日本の子供たちに

## はしがき

お母さんがちょうのマザア・グウスはきれいな青い空の上に住んでいて、大きな美しいがちょうの背中にのつてその空を翔かけつたり、月の世界の人たちのつい近くをひようひょうと雪のようにあかるくとんでいるのだそうです。マザア・グウスのおばあさんがそのがちょうの白い羽根をむしると、その羽根がやはり雪のようにひらひらと、地の上に舞もうてきて、おちる、すぐにその一つ一つが白い紙になって、その紙には子供たちのなによりよろこぶ子供のお唄が書いてあるので、イギリスの子供たちのお母さんがたはこれの子供たちにいつも読んできかしてくださいのだそうです。いまでもそうだろうと思います。それでそのお話をお母さんからうかがったり、そのお唄を夢のようにうたっていたいたりするイギリスの子供たちは、どんなにあの金きんの卵をうむがちょうや、マザア・グウスのおばあさんをしたわしく思うかわかりません。

ですが、ほんとうをいえば、そのマザア・グウスはやはりわたくしたちと同じこの世界

に住んでいた人でした。べつにお月さまのお隣の空にいた人ではありません。子供がすきな、そうして、ちょうどあのがちようが金の卵きんでもうむように、ぼつとりぼつとりこの御本の中にあるような美しい子供のお唄を子供たちの間におとしてゆかれたのでした。ありがたいお母さんがちようではありませんか。

そのグウスというおばあさんはいまから二百年ばかり前に、その当時英国の植民地であった北アメリカにうまれたかたでした。そのおばあさんに一人のちっちゃなまご息子むすこがありました。おばあさんはそのまご息子がかわゆくてならなかつたものですから、その子をよくこぼせるためにその子のよろこぶような、そうしてその子の罪のない美しいお夢をまだまだかわいいきれいな深みのあるものにしてやりたいのでした。それでいろいろなおもしろいお唄をしぜんと自分でつくりだすようになりました。やっぱりその子がかわいかったのですね。

それも初めはただなんということなしに節をつけておはなししたり、うたったりしたものでしょうが、そうしたものはどうしても忘れやすいものですから、また覚え書きに書きとめておくようになりました。そうなるもまた、そうして書きとめておいたのが一つふえ二つふえしていつかしら一冊の御本にまとまるようになったのでしょう。

そのおばあさんの養子にトオマス・フリイトという人がありました。この人は印刷屋さんでした。で、そのお母さんが自分の息子のためにうたってくださいった、そうしたありがたいお唄を刷<sup>す</sup>つて、自分の息子ばかりでなく、ほかのたくさんの子供たちをよろこばしてやりたいと思つたのでした。それでこのマザア・グウスの童謡の御本がはじめて刷られて、ひろく世間によまれるようになりました。それは西洋暦の千七百十九年という年で、時のイギリスの王さまはジョウジ一世ともうされるおかたでした。

で、このマザア・グウスの童謡はずいぶんと古いものです。古いものですけれど、いつまでたつても新しい。ほんとにいいものはいつまでたつても昔のままに新しいものです。考えてみてもその御本がでてから、イギリスの子供たちはどんなにしあわせになつたかわかりません。その子供たちがおとなになり、またつきからつきにかわいい子供たちがうまれてきて、またつきからつきにこのお母さんがちようのねんねこ唄をうたつて大きくなってゆくのです。それにこの御本がでてからしあわせにされたのはそのイギリスの子供ばかりではありません。イギリスのことばをつかつている国々の子供はむろんのことですが、世界じゅうのいろいろな国のことばに訳されていますので、そうした国々の子供たちもみんなしあわせにされているはずです。それにいろいろ作曲されて、ずいぶんひろくうたわ

れているようです。ですから、赤いくちばしと赤い水かきとをもったがちょうのおばあさんがおいすに腰かけて、おなじような赤いちっちゃなくちばしと赤いちっちゃな水かきとをもったちっちゃながちょうをおひぎにのつけて、赤い御本をひらいている画えのついた表紙のや、三角帽さんかくぼうのリボンに鷺がペンをさしたおばあさんがテエブルの前に腰をかけて、なにか書いていると、そのそばから大きながちょうがくちばしをあけて、針の頭のように眼めをちっちゃくしてのぞきこんでいる画のや、がちょうとおばあさんが空を翔かけているのや、みどりいろ緑色の牧草まきぐさの中に金の卵をおとしている白いめんどりのがちょうのや、いろんな本がでています。

日本ではこのわたしのが初めてです。日本の子供たちのために、わたしはこのお母さんがちょうを日本の空の上に来てもらいました。そうして空からひらひらとその唄のついたがちょうの羽根をちらしてもらったのでした。その羽根にかいてある字はイギリスの字です。すから、わたしは桃色のお月さまの光でひとつひとつすかしてみ、それを日本のことばになおして、あなたがた、日本のかわいい子供たちにうたってあげるのです。そしてみんなうたえるようにうたいながら書きなおしたのですからみんなうたえます。うたってごらんなさい。ずいぶんおもしろいから。



その童謡の中には、青い萌黄色もえぎいろの月の夜のお月さまをどびこえるめうしのダンスや、  
 紅い胸あかのこまどりが死んで白嘴しろはしがらすがお経をよむのや、王さまの前のパイのお皿から  
 うたいだす二十四匹の黒つぐみや、「パンにおせんべい」とうなるロンドンのお寺の鐘や、  
 おうちが大火事でプツングのおなべの下にもぐりこむてんとうむしのむすめや、赤いに  
 しんにのまれるくろんぼうの子供や、かごにのつて青天井あおてんじょうのすすはきしにお月さまよ  
 り高ひきわりむぎくのぼるおばあさん、おくつの中に子供をどつさりいれてしまつにこまるおばあさん、  
 挽割麦さんぎんを三斤ぬすんでお菓子をかさえる王さまや、拇指おやゆびよりもちいさな豆つぶのだ  
 んなさま、赤いおわんにのつて海へでるおりこうさん、気がいままにのつてめちやくち  
 やにかけてゆく気がいの親子、そうした、それはもうどんなに不思議で美しく、おか  
 しくて、ばかばかしくて、おもしろくて、なさけなくて、おこりたくて、わらいたくて、  
 うたいたくなるか、ほんとにゆつくりとよんで、そうしてあなたがたも今までよりもずつ  
 とかわつたお月夜の空や朝焼け夕焼けの色どりを心にとめて、いつも美しいあなたがたの  
 お夢を深めてくださるよう。そうならわたしはどんなにうれしいかわかりません。

この本の中の童謡はおもにそのマザア・グウスから訳したのですが、そのほかにもイギ  
 リスやアメリカの子供のうたついでるので違つたのがたくさんつけたしてあります。いろ

んな指あそびや、顔あそび、めくら鬼、はしご段あそびなど、日本のとちがった遊戯唄をおしまいのほうにのせてみました。皆さんでひとつやっってくださいとうれしいと思います。これからもまだいろんなものを皆さんのために書いてお贈りしたいと思っていますが、わたしもこれからほんとに念をいれて、がちようが金の卵をうみ落とすように、ほんとにいい童謡をぼつりぼつりと落としてゆきたいと思います。

では、どうぞ、この本の初めにあるその金の卵の歌からよんでいってください。するときつとがちようがあなたがたを背中にのせて、高い高いお月さまのそばまで翔かけてゆくでしょう。

大正十年九月

木みみずく兎の家にて

白秋しるす



# 序詩

## マザア・グウスの歌

マザア・グウスのおばあさん、  
いつもであるくそのときは、  
きれいながちようの背にのつて、  
空をひようひよう翔<sup>か</sup>けてゆく。

マザア・グウスのすむ家<sup>いえ</sup>は、  
一つ、ちんまり、森の中、  
戸口<sup>ごころすけ</sup>にや一羽の梟<sup>か</sup>が  
みはりするのでたっている。

むすこがひとりで名はジャック、  
その子ま<sup>ま</sup>ずま<sup>ま</sup>ずお人よし、

ずんとよいことせぬ代わり、  
ずるいわるさもようしえぬ。

市場<sup>いちば</sup>へジャックをやったれば、  
めすのがちようを買つてくる、

「まあまあ、お母さん、みておいで、  
そのうちいいこともあるでしよよ」

それからがちようのめすとおす  
なかよしこよしであそんでる。  
いつもいつしよに餌<sup>え</sup>をたべて、  
ガアガア、お池におよいでる。

ある朝、ジャックがいつてみりや、  
(ほんに話によくきいた)

金の卵があります。

うんでくれたはめすがちよう。

金の卵だ、はよ告げよ、

ジャックはお母さんへとんでゆく。

お母さんもほくほくごきげんだ。

「それはよかった、おおできじや」

ジャックは卵をうりにでる。

それをかおうと猶ジユウ太人の悪者わる、

おもう半値もつけないで、

うまうまジャックをちよろまかす。

ジャックはお嫁とりにゆきます。

むこうのおじようさんは華美好きでで、

それはかわいい、うつくしい、  
花の山査子さんざし、百合ゆりみたよう。

ところへ、あとからつけまわす  
猶太人ジユウとおしやれのおべっか屋、  
脇腹わきばらめがけて、ぶつてやろと、  
かわいそなジャックにつつかかる。

そのときすばやく、すつときは、  
マザア・グウスのおばあさん、  
杖つえでジャックをちよいと打ちや、  
道化の\*ハアレクインにはやがわり。

つづいて、おばあさんが杖あげて、  
きれいなおじょうさんをちよいと打ちや、



すぐにその子もはやがわり、  
それこそかわいい\*\*コランバイン。

金の卵は海の中、  
どさくさまぎれにほうられる。  
だけど、ジャックがとびこんで、  
またももとへととりかえず。

それで、めすがちようとつた猶<sup>ジユウ</sup>太人のやつ、  
ころしちまえといきまいた、  
割<sup>さ</sup>いて、こいつを売つとぼしや、  
ポケットにたんまり金もうけ。

ジャックのお母さんは、それみると、  
すぐがちようをひつたくり、

そして、その背にうちのつて、  
お月さまめがけてとんでいった。

\* ハアレクイン。道化芝居しほいの男役です。

\*\* コランバイン。これは女役です。



まざあ・ぐうす

こまどりのお葬ともらい式

「だあれがころした、こまどりのおすを」

「そおれはわたしよ」すずめがこういった。

「わたしの弓で、わたしの矢羽やばで、

わたしがころした、こまどりのおすを」

「だあれがみつけた、しんだのをみつけた」

「そおれはわたしよ」あおばえがそういった。

「わたしの眼々めめで、ちいさな眼々で、

わたしがみつけた、その死骸しがいみつけた」

「だあれがとつたぞ、その血をとつたぞ」

「そおれはわたしよ」魚さかながそういった。

「わたしの皿に、ちいさな皿に、  
わたしがとったよ、その血をとったよ」

「だあれがつくる、きようかたびら経帷子をつくる」

「そおれはわたしよ」かぶとむしがそういった。

「わたしの糸で、わたしの針で、

わたしがつくる、経帷子をつくる」

「だあれがしるす、かいみょう戒名をしるす」

「そおれはわたしよ」ひばりがそういった。

「あかるいならば、くれないならば、

わたしがしるす、戒名をしるす」

「だあれがたつか、お葬式ともらいにたつか」

「そおれはわたしよ」おはとがそういった。

「葬ともらってやるよ、かわいいそなものを、  
わたしがたとうよ、お葬式にたとうよ」

「だあれがほるか、お墓の穴を」

「そおれはわたしよ」ふくろがそういった。

「わたしの饅こてで、ちいさな饅で、

わたしがほろよ、お墓の穴を」

「だあれがなるぞ、お坊ぼうさんになるぞ」

「そおれはわたしよ」白しろ嘴はしがらすがそういった。

「経きよ本ほんもって、小本こほんをもって、

わたしがなるぞ、お坊さんになるぞ」

「だあれがならず、お鐘をならず」

「そおれはわたしよ」おうしがこういった。

「わたしはひける、力がござる、  
わたしがならそ、お鐘をならそ」

空その上からみんなの小鳥が、

ためいきついたりすすりなきしたり、

みんなみんなきた、なりだす鐘を、

かわいそなこまどりのお葬ともしい式の鐘を。



## お月夜

へっころら、ひよっころら、へっころらしよ。

ねこが胡弓<sup>こぎゆう</sup>ひいた、

めうしがお月さまとびこえた、

こいぬがそれみてわらいだす、

お皿がおさじをおっかけた。

へっころら、ひよっころら、へっころらしよ。

天竺てんじくねずみのちびすけ

天竺てんじくねずみのちびすけは、

ちびだからふとつちやいなかった。

いつもあんよでおあるきで、

たべるときや断食だんじきやいたさない。

さてそこからかけてでりや、

けつしてそこにはもういない。

きけば、かけてるそのときは、

どっちみちじつとしちやいないそだ。

キイキイなくのは常々ふんだんだ、めちやくちやあばれもたままだ。

それがさわいでわめくときや、けつしてだまっちやいなかった。

たとえねこからおそわらなくとも、  
はつかねずみがただのねずみでないのは御承知だ。

ところでたしかなうわさだが、

ある日、ひよつくり気がふれて、奇態な死に方した話。

とても勘かんのいい、金棒かなぼう引きの人たちは、

きやつめおつ死ちんだで、いきてるわけないぞといっている。

## 木のぼりのおさる

木のぼりのおさるさん、

おちたときや、そのときやおちていた。

石の上のつんがらす、

飛ったときや、そこらにや影もない。

りんごかじりの婆おかみ、

二つたべたときや、一対たべていた。

水車場がよいの小荷駄うま、

てくるときや、じつとたつちやいなかった。

拇おやゆび指さちよんぎつたうしころし、  
けがしたそのときや、血をだした。

かけっこしてゆくお供オともさん、

はやがけするときや、かけあしだ。

おくつそそくるくつなおし、

つくろつちやつたそのときや、しあげてた。

ろうそくつくるがろうそく屋、

型からひっぱいだときや、手にもつてた。

スペインさしていった艦かアんたい隊、

かえったときや、またぞろやってきてた。

## くるみ

ちいさな緑のお家うちがひとつ。

ちいさな緑のお家の中に、

ちいさな金茶のお家がひとつ。

ちいさな金茶のお家の中に、

ちいさな黄色いお家がひとつ。

ちいさな黄色いお家の中に、

ちいさな白しろいお家がひとつ。

ちいさな白しろいお家の中に、

ちいさな心ハートがただひとつ。

## ボンベイのふとつちよ

ひとりふとつちよがボンベイにごぎった。

ある日、日なたでたばこのんでごぎった。

そこへ、ついときたはしぎという小鳥よ、

パイプひっさらってまたふいととんじまう。

そこでじれました、ボンベイのふとつちよ。

## 六ペンスの歌

うたえうたえ、六ペンスの歌を。

衣かくし囊ふくろにやごほうびの麦がある。

二に十じゅう四し匹ひきの黒つぐみ、

焙ほうじこまれて、パイの中。

パイがはがれたそのときに、

すぐに小鳥がうたいだす。

もともと王さまにそなえます

きれいなお皿じや、そりやないか。

『王さまは会計院で、

お金の御勘定かんじょう。



おきさきやお居間で、

パンと蜜みつをめしあがり。

女中さんはお庭で、

衣裳いしやうをせつせとほしている。

そこへ小鳥が一羽とんでまいって、

つんとはじきました、女中さんのお鼻』

## 一時

いっちく、たっちく、おうやおや。

ねずみが時計をかけあがる。

柱時計がチーンとうつ。

ねずみがすたこらかけおる。

いっちく、たっちく、おうやおや。

## 卵

お乳のよに白い大理石の壁に、  
絹きぬの柔軟しなしたうすい膜かわつけて、  
すいて凝こった泉の中に

金のりんごがみえまする。

そのお城に戸一つないので、

どろぼうどもまでわりこんで金のりんごをぬすみだす。

朝焼け夕焼け

朝焼け小焼け、

ひつじかいの気がかり。

夕焼け小焼け、

ひつじかいのご後しょう生らく楽。

風がふきや

風がふきや、

まわります、

粉ひき車よ。

風がやみや、

とまります、

粉ひき車さ。

## 文なし

一文なしの文三郎<sup>もんざぶろう</sup>、文三郎をさらおうと

どろぼうどもがやってきた。

にげた、にげた、烟突<sup>えんとつ</sup>の素頂<sup>すてっぺん</sup>辺へ攀<sup>よ</sup>じてつた。

しめた、しめたとどろぼうどもがおっかけた。

それを見て文三郎、そろつとむこうへにげおりた。

こうなりやみつかるまい。

かけた、かけた、十五日<sup>じゅうごんち</sup>に十四<sup>じゅうし</sup>マイル、

それで、ふりむいたが、もうだアれもみえなんだ。

ファウスト 国手<sup>せんせい</sup>

ファウスト 国手<sup>せんせい</sup>はいい人で、

時々、お弟子たちをひっぱたく。

ひっぱたいて、おどらして、追ったてて、

イギリスでてからフランスへ、

フランスでてからスペインへ、

そしてまた、ひっぱたいて逆もどり。

## とことこ床屋さん

とこと、とこと、床屋さん、

ぶたの毛かっちよくれ、

<sup>かずら</sup>鬘がちよつくらいりようだが、

何本、その毛がありやたりる。

<sup>にしゅうし</sup>二十四本でたくさんだ。

フンとお鼻でごあいさつ。



## おくつの中に

おくつの中におばあさんがござる、  
子供がどっさり、しまつがつかない、  
おかゆぼっかり、パンもなにもやらず、  
おまけに、こつびどくひっぱたき、  
ねろちゆば、ねろちゆば、このちびら。

## 一つの石に

一つの石に小鳥が二羽よ。

ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。

一羽がとんでった、一羽がのこった。

ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。

また一羽とんでった、だあれもなくなった。

ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。

石だけぼつりのオこった。たったひとりのオこった。

ファ、ラ、ラ、ラ、ラルド。

## コオル老王

お年寄りのコオル王は愉快なお爺じっせ、

愉快なお爺じっせ、

すぐにパイプめして、お酒杯さかずきめしてね、

そして胡弓こぎゆうひきを三人ほどおめしで。

どれの胡弓ひきもよい胡弓もちだよ、

中で一番なは王さまの胡弓よ、

ツウイ・ツウイズル・デイ、ツウイズル・デイ。……

それぞれ胡弓ひきがひきでしたよ、おききな。

だれにくらびようか、めつたにまたなかる、

コオル王さまとその胡弓ひきよね。

雨、雨、いつちまえ

雨、雨、いつちまえ、

またいつかきなよ、

はよでてあアそぼに。

## 花壇にぶた

お庭の花壇にぶたがでた。

それいってとつつかめ。

小麦の畑はたけにうしがきた。

はしれ、はしれ、男の子。

クリイムのおなべにねこがいる。

はしれ、はしれ、女の子。

山火事だ。

はしれ、はしれ、男の子。

日の照り雨

日の照り雨<sup>あめ</sup>  
こはんととき  
小半時<sup>こはんとき</sup>ももてぬ。

いばらのかげに

いばらのかげに、

ひもじさ、さむさ。

花さくかげに、

しろがね、  
白金、  
黄金。

## セント・クレメンツの鐘

のぼれいそいそ、またおりなされ、  
鐘はロンドン、つけば数ござる。

「オレンジにレモン」

セント・クレメンツの鐘がなる。

「標<sup>まと</sup>のと、標<sup>まと</sup>の星」

セント・マアガレッツの鐘がなる。

「煉<sup>れん</sup>瓦<sup>が</sup>にかわら  
に瓦」

セント・ギルスの鐘がなる。



「<sup>ハアフ</sup>半ペンスに\*ファシング」

セント・マアルチンスの鐘がなる。

「パン菓子におせんべい」

セント・ピイタアスの鐘がなる。

「二本の枝、一つのりんご」

ホワイト・チャペルの鐘がなる。

「灰かき、火ばし」

セント・ジョンスの鐘がなる。

「湯わかし、おなべ」

セント・アンヌスの鐘がなる。

「バルドペエトじいさんよう」  
オルトゲエドののろい鐘。

「おまえに十シルリング貸しがある」  
セント・ヘレンズの鐘になる。

「いつはろうてくれるんじや」  
ふるいベエレエの鐘になる。

「おいらが金持ちになつたらな」  
シヨルジツチの鐘になる。

「そしたらたのむよ、そのときは」  
ステプニイの鐘になる。

「おれんしつたこつかい」と  
ボウの大きな鐘の声。

さあきた、  
手燭てしよくがお床とこへおまえをてらしにきた。  
さあきた、首切り役人がおまえのそつ首ちよんぎりに。

\* ファッシングは一ペンニイの四分の一。

## おうまのり

レデイのうまのりや、

ツリイ、ツレ、ツレエ、

ツリイ、ツレ、ツレエ。

レデイのうまのりやこんなもんよ、はい。

ツリイ、ツレ、ツレエ。ツリ、ツレ、ツレエ。

ゼンツルマンのうまのりや、

ガロツプ・エ・ツロツト。

ガロツプ・エ・ツロツト。

ゼンツルマンのうまのりやこんなもんだ、はい。

ガロツプ・エ・ツロツト、ガロツプ・エ・ツロツト。

おひやくしよのうまのりや、

ホツブルデイ・ホイ、

ホツブルデイ・ホイ。

おひやくしよどんのうまのりやこんなもんじや、はあ。

ホツブルデイ・ホイ、ホツブルデイ・ホイ。

小徑こみちにむすめ

小徑こみちのほとりにひとりのむすめが、

なんだかいつてるけど、はつきりやいえないうで、

ぐつつ、ぐつつ、ぐつつぐつつ。

むこうの小岡にひとりの男が、

たつてはいれども、じつとしちやいられず、

ひよつこり、ひよつこり、ひよつこりしよ。

## 月の中の人

月の中の人が、

ころがっておちて、

北へゆく道で、

南へいって、

凝こごえたえんどうじる豌豆汁で、

お舌をやいてこオがした。

## 十人のくろんぼの子供

十人よ、くろんぼの子供が十人よ。

おひるによばれてゆきました。

ひとりがのどくびつまらした。

そこで、九人くんにんになりました。

九人くんにんよ、くろんぼの子供が九人くんにんよ。

どの子どもどの子もあさねぼうで、

ひとりがとうとうねすごした。

そこで、八人になりました。

八人よ、くろんぼの子供が八人よ。

いっしょに\*デボンを旅してて、



ひとりがとちゆうでとどまった。

そこで、七人しちにんになりました。

七人よ、くろんぼの子供が七人よ。

木ぎれきりにとみないつて、

ひとりがまふたつに腹きつた。

そこで、六人になりました。

六人よ、くろんぼの子供が六人よ。

はちの巢いじつて、かまつてて、

ひとりがくまんばちにさアされた。

そこで、五人になりました。

五人ごおにんよ、くろんぼの子供が五人ごおにんよ。

けんかしてお訴訟をおオこした、

ひとりが裁判所へゆきました。

そこで、四人になりました。

四人よ、くろんぼの子供が四人よ。

みんなで海へとでかけたら、

赤いにしんにひとりがのおまれた。

そこで、三人になりました。

三人よ、くろんぼの子供が三人よ。

こんどは動物園へいったれば、

くまめがひとりをひん抱いた。

そこで、ふたりになりました。

ふうたりよ、くろんぼの子供がふうたりよ。

かんかん日だまりイすわりこみ、

ひとりがちぢれてやけしんだ。  
そこで、ひとりになりました。

ひいとりよ、くろんぼの子供がひいとりよ。

いよいよ、たったひいとりよ、

その子がお嫁とりにでていった。

そこで、だあれもなくなつた。

\* デボンはイギリスの西南部の一県で、デボンシイルのことです。

お月さまの中のおひとが

お月さまの中のおひとが、

お月さまの外をながめて、

そして、こうおっしゃるわ。

いま、いま、わたしはおきかかる。

赤子ねんねのみんなはいまお寝よる。

クリスマスがきますわい

右や左や、クリスマス。

がちようがふとつてめえりやす。

どうぞや一ペン<sup>いち</sup>ニイ、

じいめが帽子にほうりこんでください。

一ペンニイがおいやなら半ペンニイでもようござる。

半ペンニイでもないならば、

ごきげんよろしゅう、だんなさま。

べああ、べああ、ブラック・シイプ

べああ、べああ、ブラック・シイプ

おまえはいい毛をおもちだろ。

はい、はい、ふくろに三みふくろござります。

だんなさまにひと一ふくろ、

おくさまに一ふくろ、

だっけど、そこらの細道で、

べそかくぼっちゃんにや、いやいや。

ろうそく

ちびこ、

なまえはナンシイ・エツチコウト、

白いペツチコウトに

赤い鼻もって、

ながくたってるほど、

みじかくなってしまう。

ちつちやなテイ・ウイ

ちつちやなテイ・ウイは海へゆき、

たななしボオトにのりこんで、

ゆらゆらゆられているうちに、

ちつちやなボオトがひつくりかえり、

これでお話もおおしまい。



三月、風よ

三月、風よ。

四月は雨よ。

五月は花の花ざかり。

## お面もち

グレゴリイ・グリッグスさんは、

グレゴリイ・グリッグスさんは、

二十と七つのお面<sup>めん</sup>もちでおじやつて、

とつかえ、ひつかえ、ひつかえ、とつかえ、

街<sup>まち</sup>じゆうをやんやとわらわせる。

東へいっちやひつかぶり、

西へいっちやひつかぶり、

それでも、どの面がいちばんおすきか、

やっぱり御本人でおいいやれぬ。

ししと 一いっ角かく獣じゆう

ししと 一いっ角かく獣じゆうと

ふたりで王位をせりあつた。

ししがつよかつたで、

街を上下うえしたおおあばれ、

そこで、白パンやつたり、

黒パンやつたり、

乾プ葡萄ラム入ケイキやつたり、

やつとこすつとこおいだした。

## くつやさん

くつやさん、おうち。

はい、はい、こんにちは。

おくつをつくろいたのみます。

よしきた。がてん合点だ。

こちらにひとくき一釘、そちらに一釘、

とんとんとんとん。

きれいなくびまき

ジイニイ、むすびにきとくれよ。

ジイニイ、むすびにきとくれよ。

ジイニイ、むすびにきとくれよ。

わたしのきれいなくびまきを。

わたしはうしろでむすんでよ。

わたしは前まえでむすんでよ。

わたしは何度もむすんでよ。

もうもうわたしはかまやせぬ。

## 何人何びき何ぶくろ

セント・イブへとわしがおまいりするときに、  
わしがあつたは男ひとりにおかみさんが七しちにん人、  
そのどのおかみさんもふくろを七つ、  
そのどのふくろにもねこめが七つ、  
そのどのねこにもねこが七つ。  
セント・イブへとおまいりするものが、  
さてさて、何人何びき何ぶくろ。  
なんにんなん

## のむもの

世界が一つのパイなら、

海がすっかりインキなら、

木がまたチイズとパンならば、

おれたちののむものそりや、なんだ。

それこそ甲羅<sup>こうら</sup>経たじじいめでも

頭をかかえてちよいとまいろ。

ちびねこ、さんねこ

「ちびねこ、さんねこ、かわいいの子、どこへおまえはいつてたの」

「あたいはいつてたの、ロンドンに、おめみえしたのよ、女王さまに」

「ちびねこ、さんねこ、かわいいの子、そこでおまえはなにしたの」

「そうぞ、玉座のおいすもと、ねずみをちよろまかつかまえた」



## 雨もよう

いぬとねことがお友達にあいに、

ちよいと、街まちからつれだつてまいる。

ねこがもうします。

「お天気はどうでしょね」

いぬがもうします。

「さようさ、おくさんえ、雨がふりそでござんすが、

御心配はいりません、てまえがこもり傘かさもつてますでな。

そのときやごいっしよに、相合傘あいあいがさとはいかがでしょ」

ポウリイ、やかんを

ポウリイ、やかんをかけときな。

ポウリイ、やかんをかけときな。

ポウリイ、やかんをかけときな。

みんながのむんだ、お茶だよ。

スケイ、そいつをおはずしな。

スケイ、そいつをおはずしな。

スケイ、そいつをおはずしな。

みんながもうもう行いつちやうぞ。

パンフキン  
南 瓜 ずき

ペエタアさん、ペエタアさん、  
南 瓜 ずき、

女房もつてもお守りができず、

パンフキン  
南 瓜 の殻にと、どしこんで、

やつとこ、ほくほくお守りした。

ぼう、うおう、うおう

ぼう、うおう、うおう、

おまえさんどこのいぬ、

わたしやテインカアさんのいぬですよ、

ぼう、うおう、うおう。

さんびやくや  
三百屋

トムミイ・ツロツトさん、三百屋、

ベッドを売って、

わらの上へごろりよ。

そのわら売って、

草の上へごろりよ。

そしておかみさんに姿見鏡すがたみ一つこ買うてくりよ。

お釘くぎがへれば

お釘くぎがへれば、

蹄かなぐつ鉄くうせる。

蹄かなぐつ鉄くへれば、

おうまがうせる。

おうまがへれば、

のりてがうせる。

のりてがへれば、

戦いくさがうせる。

戦いくさがないと、

王さまのお国やうせる。

おうまの蹄かなぐつ鉄くがへったせいだよ。

## 二十四人の仕立屋

二十四人の仕立屋が

ででむしころしに、えつさつさ。

めつたにしつぽにやふれまいぞ。

そりやこそででむしが角<sup>つの</sup>だした、

ちつちええカイロうしそつくりだ。

にげにげ、にげなきやいまにもころされる。

## ででむし角だせ

ででむし、ででむし、角だせや、

お父<sup>とう</sup>さんもお母<sup>かあ</sup>さんもしんでしもうた。

おまえの御兄<sup>ごきょうだい</sup>弟姉妹は裏<sup>うら</sup>ん口<sup>くち</sup>の庭で

パンをおくれエと乞<sup>こ</sup>うている。



お針みつけたら

お針みつけたらつまみあげておとりな。

その日いちんちいいことばかり。

お針みつけてそのまましときや

その日いちんちわるいことばかり。

風よ、ふけ、ふけ

風よ、ふけ、ふけ、

ひきうすまわせ、

粉屋粉ひき、

パンやさんがこねて、

朝はほやほやふかしたて。

## 気軽な粉屋

気軽な粉屋が

デイ河かわにごぎる。

朝から晩まで

はたらいちやうたう。

ふぎけてばっかり、

一つことばかり、

おきまり文句で

一つことばかり。

『だれにかまうもんか、いやいや、わたしや、よ。  
だれがかまうかよ、このわしに。ホイソラ、ホイソラ』

いなかつぺえ

いなかつぺいのおたずねだ。

『いちごが何本海にある』

うまく返事をしてのきよか。

『何<sup>なんびき</sup>匹にしんが森にいる』

## おかごのばあさん

おばあさんがひとりおかごにのって、  
ふらふらあがる。

月よりたかく、九十倍くじゅうばいもたかく、

どこへゆくのか、きこうにもきけず、

お手々にほうきをもって、あれあれあがる。

『おばあさん、おばあさん、おばあさん、

どこへゆくのか、どこへ、

そんなにたかくあアがって』

『まるてんじょう天井のすすはきじや』

『はアやくかえってちようだいよう』

『あい、あい。ちよつくら、いますぐだ』

すつとんきような南京<sup>なんきん</sup>さん

すつとんきような南京<sup>なんきん</sup>さんがお三<sup>さん</sup>かたごぎった。

それは皆さまとくより御承知だ。

きやつきやさわいで獵<sup>かり</sup>にとでかけた。

しかも、めつそうもない、安息日<sup>あんそくび</sup>にでござる。

永<sup>なが</sup>のいちんち、獵<sup>かり</sup>をしてまわり、

これというもの根つから葉つからみつからない。

一つみつけたは帆<sup>ほ</sup>かけた船よ。

それが追風<sup>おつて</sup>にしゅつしゅつとはしつた。

「あれは船だ」と一番さきのがいいでした。

「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。

「あれは家さうち」と三番目のがいいのけた。――

「こわれ煙突えんとつまでとつついてるじゃないかいな」

永ながの一晚ひとばん狩かりをしてまわり、

これというもの根っから葉っからみつからない。

一つみつけたはおすべり屋のお月さんだ、

それがふかれてつるつるとすべった。

「あれはお月さんだ」と一番さきのがいいでした。

「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。

「あれはチイズさ」と三番目のがいいのけた。――

「二つわりにしたその半分きりさね」

またもいちんちかり狩かりをしてまわり、

これというもの根っから葉っからみつからない。

一つみつけたは木いちごやぶのはりねずみ。  
それをうしろにとおりすぎてしまう。

「あれははりねずみだ」と一番さきのがいいでした。

「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。

「あれは針さしき」と三番目のがいいのけた。――

「よくもめちやくちやにお針をさしたもんだすな」

またも夜つびで、猫をしてみわり、

これというもの根つから葉つからみつからない。

一つみつけたはかぶら畑ばたけの野うさぎだ。

それをみすててまたいつてしまう。

「あれは野うさぎだ」と一番さきのがいいでした。

「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。



「あれはこうしき」と三番目のがいいのけた。――

「あいつ、めうしにおきざりされたやつだんね」

またもいちんち、獺をしてまわり、

これというもの根っから葉っからみつからない。

みたは洞木うろぎの分別顔ぶんべつがおのふくろうよ。

それをうしろにまたいつてしまった。

「あれはふくろうだ」と一番さきのがいでした。

「なんの、うそだ」と二番目のがうちけした。

「あれはじじいさ」と三番目のがいいのけた。――

「それぞれごましお頭の髪をみさいな」

## 鼻まがり

あいつあよつぽどみようだ、まつすぐにやゆかぬ。

そのわけしってるか、

鼻のむいたほうへむいてゆく。

どうりで、やつこさん、鼻まがり。

あの丘のふもとに

あの丘のふもとに

おばあさんがござった。

もしも去<sup>い</sup>なんたら

まだ住んでござろう。

## あたいのめうし

あたいのめうしはちっぽけだ。

ひよろひよろ、ひよっこり、ひよっこりよ。

あたいのめうしは、ちっぽけだ、

めうしのふくらはぎはちっぽけだ。

ひよろひよろ、ひよっこり、ひよっこりよ。

あたいのお歌はまだなかば。

あたいのめうしはちっぽけだ。

ひよろひよろ、ひよっこり、ひよっこりよ。

あたいのめうしはちっぽけだ。

やっとうし小屋へおいこんだ。

ひよろひよろ、ひよっこり、ひよっこりよ。

そこでお歌もちゃんちゃんだ。

## ゆりかごうた

ねんねや、ねんねや、おねんねや、

ぼうやがお父さんとうひつじ守りも。

お母さんかあはねんねのねむりの木、

ねんねやねんねとゆすりましょう、

ゆすればお夢がふりかかる。

ねんねや、ねんねや、おねんねや。

## こびつちよの子供は

こびつちよの男の子はなんでつくる、なんでつくる。  
こびつちよの男の子はなんでつくる。

かわずとででむしとこいぬのしつぽでつくられた。  
それぞれ、こびつちよの男の子がつくられた。

かわいい女の子はなんでつくる、なんでつくる。

かわいい女の子はなんでつくる。

おさとうに薬味やくみに、あまいものずくめ。

それぞれ、かわいい女の子がつくられた。

ねんねこうた

ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや、  
なアいてお母<sup>か</sup>さんをなかなや、  
なかれりやわたしもつろござる。  
ねんねこ、ねんねこ、ねんねこや。



はしっこいジャツク

はしっこいジャツク、

すばやいジャツク、

ろうそくたて一つ、

ジャツクが

とびこした。

ででむし、でむし

ででむし、でむし。

ぬすつとがくるぞ、おめんちの壁を

ぶっこわしにくるぞ。

ででむし、でむし。

その角だせよ。

ぬすつとがくるぞ、小麦をとり、

ぬすつとがくるぞ、夜あけの四時に。

いちれつ  
一列こぞつて

いちれつ  
一列こぞつて、

弓をひき、

おはとを射ったら、

からすめをころした。

で  
で  
むし

で  
で  
むし、  
で  
で  
むし、  
角  
だ  
せ  
や。  
パ  
ン  
と  
お  
麦  
を、  
そ  
れ、  
あ  
げ  
よ。

## おりこうさん

とてもがむしやら、おりこうさん、  
いきなりばんばら敷やぶへとびこむと、  
眼玉めだまがポンポンひんむけた。

おやおやつ、眼玉がつん出たら、

それこそこんどはくそ力、

横つちよの小敷へとびこんだ。

そしたら眼玉がすつこんだ。

おしやべり

やまがらのおしやべり、

お舌したがさけよぞ。

町じゅうのいぬが

ちんぢんにかんじやうぞ。

## ハアトのクイン

ハアトのクインが饅頭タアトをつくられた。

みんなできたよ、夏の日いっぱいかアかった。

ハアトの兵士ネイブが饅頭タアトをぬうすんだ。

こいつしめたとそつくりもつてにげてつた。

ハアトのキングが饅頭タアトとおつしやつた。

そりやこそたいへん、兵士ネイブを御折檻ごせつかんなすつた。

ハアトの兵士ネイブが饅頭タアトをかえした。

まっぴら閉へいこう口して、もうもういたしません。

## コケコツコおどり

コケコツコ、コケコツコ、コケコツコ。

おくさんがおくつをなあくした。

だんなさんがヴァイオリンの弓をなくし、

どうしていいのかおおよわり。

コケコツコ、コケコツコ、コケコツコ。

おやおや、おくさんどうなさる。

だんなさんがヴァイオリンの弓をさがす、

それまで、はだしでおおどりか。

コケコツコ、コケコツコ、コケコツコ。

おくさんがおくつをなあくした。



だんなさんがヴァイオリンの弓をみつけ、  
それきた、コケコッコ、コケコッコ。

コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。

さあさあ、おくさん、それおどろ。

だんなさんがヴァイオリンの弓をこすり、  
それそれおどれと、コケコッコ。

コケコッコ、コケコッコ、コケコッコ。

おくさんがおくつをなあくした。

ねてもねられずおおよわり、

頭の髪かみげもめつちやくちや。

でんでんむしむし

でんでんむしむし、

角ひけよ。

ひかなぎや 山<sup>さん</sup>椒<sup>しよ</sup>の粒<sup>つぶ</sup>ふりかける。

おばあさんとむすこ

ひとりのおばあさんと三人のむすこ、

ジェリイ、ジェムス、それにまたジョンよ。

ジェリイは首くくつた。ジェムスはおぼれた。

ジョンはどこかへいなくなつてしまつた。

だアレもみつけたものがない。

三人のむすこがみんなしんでしまつた。

ジェリイ、ジェムス、それにまたジョンよ。

## てんとうむし

てんとうむし、てんとうむし、

はよう家<sup>うち</sup>へかえれ、

おまえの家<sup>うち</sup>や火事だ。

みんな子供がやけしんだ。

むすめのアンヌがたったひとり、

プツジングのなべの下に

つんぐりむんぐりもぐった。

あつたかいパン

あつたかいパン、

あつたかい、あつたかい、あつたかいパン。

一ペンニイで一つ、二ペンニイで二つ、

あつたかいパン。

おまえにむすめがないならば、

おまえのむすこにおあげなえ。

一ペンニイで一つ、二ペンニイで二つ、

あつたかいパン。

## ゴツトハムの三りこう

さてもゴツトハムの三りこう、

おわんにのっかって海へでた。

もそつとおわんがしつかりさえしてりや、

ここらでこの歌もきれやしまい。

## 気ちがい家族

気ちがいの御亭主に、

気ちがいのおかみさん、

気ちがい小路こうじに住んで、

三つ児をうんで、

どの児もどの児も気がちごた。

お父さんが気ちがい、

お母さんが気ちがい、

みんな子供が気ちがい。

気ちがいうまにのつて、

いっしょくたに、みんなのつて、

まっくら三さん宝ぼうに、かけてつた。

ちっちやなだんなさま

あたいのちっちやなだんなさま、

拇おやゆび指びよりかもまだちさい。

こまめのおつぽにちよいといれて、  
どんがどんがはやしてせりあげよ。

ちっちやなおうまも買こうてあぎよ。

そして、とつととかけさして、

たづなとらせて、くらおいて、

さあさ、ねりだそ、町の外。

かわいいくつした結いくなら

それにはちっちやなとめ金具かなぐ、



ちつちやなお鼻をふきやるには  
かわいいちつちやなハンカチフ。

## 一つのたるに

一つのたるに、三人はいり、

どんどこ、どんどこ、すつどんどん。

あいつらだれだ。

肉屋にパン屋、

ろうそく屋の亭主。

つっころがしてしまえ。

しよのねえやつらだ。

## ジャックとジル

ねんねの小鳥が岡おかに二羽、

一羽がジャックで、ほかのがジルよ。

とんでつたジャックが、

とんでつたジルが、

またきたジャックが、

またきたジルが。

## トムトムぼうず

トム、トム、トムぼうず、

笛ふきのむすこ、

ぶたをぬすんでにげたはよいが、

ぶたはたべられ、トムあぶつたたかれ、

ないておんおん街をかけた。

いぬはぼうおう

いぬはぼうおう、

ねこはみゆうみゆう、

おぶたはぐるんぐるん、

ねずみはすけえく。

ふくろはつうふう、

からすはかうかう、

めがもはくわつくくわつく、

うしもうもう。

ちいさなおじよっちゃん

額のまんなかに、きらきらちぢらした

ちいさなまきげの、

ちいさなおじよっちゃん、

ごきげんいいときや、

それはそれはいい子で、

おわるいときにはこオわい子。ソレ、こオわい子。

## やぶ医者

やぶ医者の方オスタアさんが、  
グロオスタアへいって、  
にわか雨にあつて、  
水たまりに立ち往生して、  
おへその上まで水びたり。  
それから二度とはようゆかぬ。

## きれいずきのおかみさん

お月さんのおとりもちでお嫁にござった。

きれいずきの、世帯しよたいもちの、しまりやおかみさんだ。

おひるにでもならなきやなんとしてもおきない。

ほんとにしまるなら、それこそたのむよ。

やつとこさとおきればおもいきつてせかせか、

きれいずきの、世帯もちの、しまりやおかみさんだ。

灰かきで麦こつ粉をやつさもつさこねます。

ほんとにしまるなら、それこそたのむよ。

ながぐつにどろどろどしこんだバタをよ、

きれいずきの、世帯もちの、しまりやおかみさんだ。



ひっかき棒のかわりにお足でべっちやべっちや。

ほんとにしまるなら、それこそたのむよ。

チイズは台所の物置のおたなに、

きれいずきの、世帯もちの、しまりやおかみさんだ。

ひとりでにころげるまでうっちやっちやつかまわな。

ほんとにしまるなら、それこそたのむよ。

## 御婚礼

ぶうん、ぶうん、ぶうぶうぶ。

はえがくまんばちにお嫁いり、

いよいよ教会へいきやして、首尾よく御祝儀あいすんだ。

はえとくまんばちの御婚礼。

## タツファイ

タツファイはウエルス人、タツファイはどろぼう。

わたしの家うちにやってきて、牛肉ひとくれ一塊ぬうすんだ。

タツファイの家うちへいったらば、タツファイはいなかつた。

タツファイがやってきて、髓ずいこつ骨一本ぬうすんだ。

タツファイの家へいったらば、タツファイはいなかつた。

タツファイがやってきて、こんどは麵めんぼう棒ぬうすんだ。

タツファイの家へいったらば、タツファイはねていた。

そこで火棒ひかきとって、そいつの頭になげつけた。

## ばばア牛

黒白まだらの御面相は、

チャアレエ・ワアレエの女郎牛<sup>めろうし</sup>だ。

その木戸あけねえか、おとおりじや。

チャアレエ・ワアレエのばばア牛。

とつびよくりん

とつびよくりんのとん吉が、  
とつびよくりんのとん吉が、  
おまんじゆうをいただいて、  
そとがわだアけのオこした。

## 卵うりましようと

卵うりましようと、わしがゆく道で、

でおうた、でおうたよ、ねじれ足とでおうた。

足はねじれ足、爪<sup>つめ</sup>まがり爪<sup>つめ</sup>、

こいっおもしろいとかかとをちよいとすくう、

そこで、すんと地べたに小鼻をぶつつけた。

## かささぎが一羽よ

かささぎが一羽よ、なしの木にとオまった。

かささぎが一羽よ、なしの木にとオまった。

かささぎが一羽よ、なしの木にとオまった。

おおしんど、ああしんど、おおしんどよう。

うれしそに一度よ、ちちんがちんとはねた。

うれしそに二度よ、ちちんがちんとはねた。

うれしそに三度よ、ちちんがちんとはねた。

おおしんど、おおしんど、おおしんどよう。

これ、これ、こいきな

「これ、これ、こいきなおむすめご、  
おまえはどちらへおいでです」

「お乳しぼりにまいます」

「これ、これ、こいきなおむすめご、  
わたしもいつしよに行いてあぎよか」

「ええ、ええ、そんならうれしいわ」

「これ、これ、こいきなおむすめご、

おまえのお父さんはなになさる」

「わたしのお父さんはおひやくしようよ」



「これ、これ、こいきなおむすめご、  
おまえさんに財おたから産ありましよね」

「いえ、いえ、御器量ごきりょうが財おたから産よ」

「これ、これ、こいきなおむすめご、  
そんならお嫁さんにやちとこまる」

「いらぬおせわでござります」

いちば  
市場へ、市場へ

いちば  
市場へ、市場へ、乾<sup>プ</sup>葡萄<sup>ラム</sup>入<sup>ム</sup>ケイキかいに、  
かえろよ、かえろよ、市場にやおくれた。

市場へ、市場へ、乾<sup>プ</sup>葡萄<sup>ラム</sup>入<sup>ム</sup>。パンかいに、  
かえろよ、かえろよ、市場ははねた。

## 数学

掛け算はしちめんどう、

割り算はいんごう因業、

比例は人なかせ、

応用問題気がちがう。

眼め

青い眼めはきれい、

灰色の眼は陰気、

黒い眼は腹黒、

鳶とびいろ色眼玉はおばアけ。

## 五月のみつばち

五月のみつばちや、  
ほしくさいちだ  
乾草一駄よ。

六月のみつばちや、  
銀のさじとおなじ価ねよ。

七月のみつばちや、  
はえの一匹にも、つつかわぬ。

## 朝のかすみ

朝のかすみと夕焼け空は、

ひより  
日和よいとの前しらせ。

くもる日ぐれと朝焼け空は、

よ  
お寝るひつじをみなぬらす。

## かつこ鳥

きれいな小鳥、かつこ鳥、  
とびとびうたうかつこ鳥、  
ないてしらすするその声は、  
つゆうそのないいいしらせ。

小鳥の卵ねすするゆえ、  
なく音ねすずしいかつこ鳥、  
はやもなきます、かつことうと、  
夏がもうじきまいます。

豆(こ)ぞう

豆んちよの家の<sup>うち</sup>、

豆んちよのこぞうっこ、

よその養魚池<sup>かいぼり</sup>へおしかけて、  
魚<sup>さかな</sup>をびんぴとつりあげた。



## ソロモン・グランデイ

ソロモン・グランデイは、

月曜日にうまれて、

火曜日に洗礼うけ、

水曜日に嫁とつたが、

木曜日には病気になり、

金曜日にずんと重<sup>おも</sup>つて、

土曜日におつ死<sup>ち</sup>ぬちゆうと、

日曜日にはうめられた。

ソロモン・グランデイの御<sup>ご</sup>一<sup>いち</sup>代<sup>だい</sup>。

そこでおしまい、ちやアんちゃん。

かえるの殿御とのご

お池にござるはかえるどの、  
お池にござるはかえるどの、  
はつかねずみは粉小屋こなごやに。

相手ほしやのかえるどの、  
相手ほしやのかえるどの、  
でんでんむしの背中にうちのつて。

はつかねずみのお宿やどまで、  
はつかねずみのお宿まで、  
そこで戸たたたく、ものもうす。

「はつかねずみのお姫さま、わたしや其様そさまにあいにきた、  
はつかねずみのお姫さま、わたしや其様そさまにあいにきた、  
お気にめしたか、めすまいか」

「なんとお返事いたさりように、  
なんとお返事いたさりように、  
まして叔父様おじさまのるすのうち」

ねずみの叔父御おじごがもどられて、  
ねずみの叔父御おじごがもどられて、  
「だれかみえたぞ、るすのうち」

「いやな殿御とのごがござんした、  
いやな殿御とのごがござんした、  
叔父様おじさまのるすにござんした」

そこでなきなき、かえるどの、

なきなき、小川をかえるどの、

めがものお上じょうろう 藤とであわしやる。

よいものみつけた、ござんなれ、ござんなれ、

めがものお上じょうろう 藤に、かえるどの

ぱくとのまれてきゆうきゆうきゆう。

さてもあわれな物語、

ここらあたりで、あなかしこ。

## 一切空

一切空<sup>いっさいくう</sup>ちゅうおばあさんがどこかしらにござった。

豆<sup>まめ</sup>つちよろのお家<sup>いえ</sup>におさまりかえつてござった。

そこへだれだかぬうとでて、

かつと口<sup>くち</sup>あけ、すう、ぱくり。

お家<sup>うち</sup>もおばあさんも一切空。

## ロンドン橋

ロンドン橋ばしがおちた。

ロンドン橋がおちた。

なんでこんどかけるぞ。

なんでこんどかけるぞ。

銀と金とでかけてみろ。

銀と金とでかけてみろ。

銀も金もぬすまれた。

銀も金もぬすまれた。

鉄と鋼鉄とでかけてみる。

鉄と鋼鉄とでかけてみる。

鉄でも鋼鉄でもへしまがる。

鉄でも鋼鉄でもへしまがる。

材木と粘土とでかけてみる。

材木と粘土とでかけてみる。

材木、粘土はながされる。

材木、粘土はながされる。

そんなら石でかけ、そりや丈夫だ。  
じよぶ

千年万年大丈夫だ。  
だいじよぶ

## 世界じゅうの海が

世界じゅうの海が一つの海なら、

どんなに大きい海だろな。

世界じゅうの木という木が一つの木ならば、

どんなに大きな木であるな。

世界じゅうの斧おのが一つの斧なら、

どんなに大きな斧だろな。

世界じゅうの人たちがひとりの人なら、

どんなに大きな人だろな。

大きな人がおおきな斧をとつて、

大きな木をきり、

大きなその海にどしんとたおしたら、

それこそ、どんなにどんなに大きい音だろな。





## 空はじめじめ

空はじめじめ、

雨もよい、

ちっちゃなおじいさんにておうたら、

身ぐるみ革かわきて、

あごに無縁帽シヤッポつんだして、

「おさむう、おさむう、こんにちは」

空はじめじめ、

おわかれと、

よぼよぼなかが手がにぎり、

身ぐるみ革きて、

あごに無縁帽シヤッポつんだして、

「さよなら、さよなら、またいつか」

## アアサア王

アアサア王の御治世<sup>ごじせい</sup>じや、

アアサア王はよいかたで、

ひきわりさんぎん  
挽割麦三斤ぬウすんで、

袋<sup>ふくろなり</sup>形のプツジングをこさえよか。

いよいよ王さまのお手製で、

それには山もり乾<sup>ほし</sup>ぶどう、

おやゆび  
拇指二つよりかまだふとい

あぶらにく  
脂肉を一一塊<sup>ふたきれ</sup>どしこんだ。

王さまとおきさきとがまずめして、

つぎに大臣たちがおしょうばん、

そしてその夜のおあまりは、  
翌朝よくあさおきさきが油あぶらあ揚げ。

がぶがぶ、むしやむしや

どうしたことだえ、このおばば、  
のんだりくったり、そればかり、  
ほかにはなんにもようせぬで、  
くうのとのむのが商売かい、  
むしやむしや、がぶがぶ、ぐずりばば、  
ぶつぶつぶつぶつまだやめぬ。

てんじく  
天竺ねずみは

てんじく  
天竺ねずみは追っかけごっこがだいすきだ。

ツラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ。

とら  
捕よとおもうならまず駈けた、

それ手をはなした、

どっちがはやいか。

ツラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ、ラ。

## ジャック・スプラットと

ジャック・スプラットとその<sup>かか</sup>鼻<sup>か</sup>さ。

じいさはたべてもやせこけた、

ばばさはふとつても<sup>いじぎた</sup>意地汚<sup>た</sup>だ。

ふたりの<sup>あいな</sup>間<sup>なか</sup>中<sup>なか</sup>を、ちよとごらん、

お皿はすべすべなめてある。



せぼね  
背骨まがり

せぼね  
背骨まがりのあまのじやく、

背骨まがりの旅をして、

背骨まがりの石段で、

背骨まがりの六ペンスをひろい、

背骨まがりのねこを買い、

背骨まがりのねずみをとらせ、

背骨まがりの豆んちよの家に、  
いえ

背骨まげまげおさまった。

(注) あちらでは、つむじまがりのことを背骨まがりと申します。

おらがお父は<sup>とと</sup>

おらがお父はおつ死んだ<sup>ち</sup>。

何<sup>あん</sup>といつてええだが、こちやしらぬ。

うまを六匹くんさんし。サテ、

犁<sup>すき</sup>でもつてすけちゆうだ、おえちゆうだよ。

うまを六匹売つとばし、

めうしを一匹、こちや買つてな、

ひとしんしょう  
一身上<sup>あん</sup>べとごきげんだ。サテ、

何<sup>あん</sup>としてええだが、まだしらぬ。

そこでめうしを売つとばし、

ふくらはぎを一本、こちや買つてな、

一身上あんべとごきげんだ。サテ、  
極上肉を半ぺら、またなくす。

そこでふくらはぎを売つとばし、

めねこを一匹、こちや買つてな、

あまつちよのねこめも愛ういやつじや。サテ、  
煙突けむだしのすみつこに、ちよんとすわる。

またまたねこめを売つとばし、

はつかねずみを、こちや買つてな、

尻尾しっぽつまんで火になげた。サテ、

おらのお家うちがぼうともえた。

ねこと王さま

さてもこのたび、ねこが王さまに御<sup>ご</sup>拜<sup>はい</sup>謁<sup>えつ</sup>、  
ごぶじにおさまりや、しあわせだ。

がアがア、がちよう

がア、がア、がちよう、

うろついでどこいこ、

階かいじょう上したを、下したを、

おくさまのへやで、

じじいにてあつた、

そのじじいどうした、

不信心ぶしんじんないやなやつ、

そこで、そいつの左の足をすくつて、

すつてんころりとあがり段だんからころがした。

## 火の中に

火の中に石脂<sup>タール</sup>、

櫛<sup>かし</sup>の中にはすつからかん。

泥<sup>どろ</sup>の中<sup>なア</sup>にうなぎ、

粘土の中にはすつからかん。

やぎ<sup>つた</sup>が蔦<sup>つた</sup>くう。

めうまが麦くう。

火ばしの一対

足なが、せむし、  
こあたま、  
小頭、眼なし、  
それなアに。

## お月さま光る

おじよつちゃん、おぼつちゃん、外へでてあすぼ、  
お月さま光る、昼のようにあかる。

口笛ふいてきなよ、よばわつてきなよ。

上々きげんででてきなよ。でなけりやおことわり。

夕飯ゆうめしうつちやつて、石盤せきばんうつちやつて、

街へでてきなよ、あそびなかまがまつているに。

ときの声あげて、とんだりはねたりしておいで、

お月さまの光にぐるぐるまわつておどりましょう。

あがり段にのぼり、石垣とびおりて、

ころがしやお銭せせがなにもかもくれる。



牛乳が買える、はちのみつが買える、  
半時はんとぎたたずにおまんじゅうが買える。

## おもちやのうま

はいしどうどう、

おうまにのって、

チャアリング・クロスへいてみよか。

きれいなレデイが、

白いうまにのって、

お手々に指輪、

おくつに鈴つけ、

ちんからちんからとおる、

それみにいこか。

ちんからちんから、りんりん。

なけなけ

なけなけ、赤ちやん、

眼玉にお指をつっこみな。

そしてお母<sup>か</sup>さんへ行ったらば、

あれはぼうやじゃないとおいしい。

## 北風ふけば

北風ふけば、

雪がふろ、

かわいそなこまどりはどうするぞ。

かわいそなものね。

お倉なアかの中の刈麦かりむぎに、

もウぐりこウぐり、ぬくもろぞ、

お羽根うウらの裏うらに首まげて。

かわいそなものね。

## めくら鬼

めくら鬼、めくら鬼、

めん眼めがみえないごぞんじか、

くるくる三遍まアわって、

わたしをつかめてごらんね、

こオろぶなころぶな、

だれでもいいからとつつかめ。

わたしはこつちだよ、とつつかまえたとおおもいか。

笑しょうし止しょうし笑しょうし止しょうし、めくら鬼。

## お山の大将

みろやい、ひととび、

おりやここだ、

だアレもこれまい、

おれひとり。

上へいった

上へいった、いった、いった。  
下へいった、いった、いった。  
前へいった、うしろへいった。  
ぐるぐるぐるとまアわった。

## みんなして森へ

(五つの指のさきをつついてうたう)

- 一 このぶた申す。みんなして森へ。
- 二 このぶた申す。なにしに森へ。
- 三 このぶた申す。お母さんにあいに。
- 四 このぶた申す。そしてそしてどうするの。
- 五 このぶた申す。かじりついてキッスしよ、キッスしよ。



このぶた、ちびすけ

(おなじく)

- 一 このぶた、ちびすけ、市場<sup>いちば</sup>へまいった。
- 二 このぶた、ちびすけ、お留守番でござる。
- 三 このぶた、ちびすけ、牛肉あぶった。
- 四 このぶた、ちびすけ、なアんにももたなんだ。
- 五 このぶた、ちびすけ、ういういうい。  
いっしよにお家<sup>うち</sup>へ、よいところしよ。

おくつをはかしよ

(五つの足をつつきながらうたう)

- 一 おくつをはかしよ、こうまにはかしよ。
- 二 めうまにはかしよ。
- 三 ふくろを背せなにのしよ。
- 四 しよったか、みよよ。
- 五 しよったら、麦よ。  
しよわなきや、脳みそぶつつウぶしよ。

ながい尾のぶたに

ながい尾のぶたに、

みじかい尾のぶたに、

尾のないぶたに、

めぶたにおぶた、

まきじつぽのこぶた。

あアがった、あがった

甲 あアがった、あがった、はしご段を二つ。

乙 ちようど、わたしのとおりよ。

甲 あアがった、あがった、はしご段を四つ。

乙 ちようど、わたしのとおりよ。

甲 おへやへはいった。

乙 ちようど、わたしのとおりよ。

甲 お窓の外そオトをなアがめた。

乙 ちようど、わたしのとおりよ。

甲 そこでおさるをみつけた。

乙 ちようど、わたしのとおりよ。

ワン、ツウ、スリイ、

フォア、ファイブ

ワン、ツウ、スリイ、フォア、ファイブ、  
魚をさかなピンピンつかまえた。

なぜそれにかした。

指をかんだ、手をかんだ。

どっちの指かアんまれた。

この右の小指よ。

## 顔あそび

との  
殿さま、御着座。おちやくざ (額)

ふたりの御家来。ごけらい (両方の眼)

おんどり。(右のほお)

めんどり。(左のほお)

いそいで御入来。ごじゆらい (口)

チンチヨツペア、チンチヨツペア。

チンチヨツペア、チン。(あごをなでる)

## このベル

このベルならした。

(髪の毛を一つまみ、ひっばる)

このドアたたいた。

(額をたたく)

この錠じょうはずした。

(鼻をつまみあげる)

さあ、さあ、はいりましよ。

(口をあいて指を中へつつこむ)

## 足

二本足がすわった、三本足の上に。

一本足をしやぶった。

四本足しほんあしがやってきて、

一本足さらってにげてった。

二本足がとびあがり、

三本足をひつつかみ、

四本足めがけてなげつけた。

そこで一本足をとりかアえした。

(注) 一本足は牛の骨、二本足は人間、三本足は腰かけ、四本足は犬。



一番目のお床

- 一番さきにねた子に金の財布さいふ、
- 二番目にねた子に金の雉子きじ、
- 三番目にねた子に金の小鳥。

おしまい

よぼよぼがらすが

一羽地にとまった。

そこでお謡うたもちやんちやんだ。

## 巻末に

「マザア・グウス」の童謡は市井しせいの童謡である。純粹な芸術家の手になったのではなからう。しかし、それだからといって一概に平俗野卑だというわけにはゆかない。日本の在来の童謡、すなわち私たちが子供のときにいつも手拍子をたたいてはうたったかの童謡はやはり民衆それ自身のものであった。だれのなにかしという有名な詩人の手になったのではない。自然にわきあがってきた民族としての子供の声であった。その中にはむろん平俗なものもあつた、いかがわしい猥雑わいざつなおとなものもあつた。しかしほんとうの子供の声はその中であつた。すぐれて光つていた。これを思わなくてはならない。本来の民謡なるものは、野山の木萱きかやのそよぎそのものからおのずとわきでたものである。はじめはだれが歌つたとなく歌いだされて、つぎつぎに歌い伝えられて、歌いなおされて、ほんとうに洗練されたいいものばかりが永く残ることになつたのである。で、その長い民族精神の伝統ということについて充分に尊重しなければならぬ。この意味で日本在来の童謡は日本の童謡の本源であり本流である。「マザア・グウス」もおなじく英国童謡の本源とみなしてい

いであろう。こうした民族の伝統ということを考えないで、ただ優秀な詩人の手になるもののみが真の高貴な歌謡だと思うのはまちがいでであろう。私はそうした妙な詩人気取りはきらいである。

ほんとうを言うと、民謡とか童謡とかいうものは、たとえそれがある種の詩人の作だつたにせよ、その歌謡が一般民衆のものとなつた以上、その作者の名は忘れられて、その歌謡だけがすべての民衆のものとなる。そうして残れば残るだけ、その歌謡は民謡として成功したものだというる。すなわち作者の名が忘れられれば忘れられるだけ、ほんとうの民謡として光あるものであるのだ。

今日「マザア・グウス」の童謡として伝えられているものうち、グウス夫人の作がむろんすべてであるとは思えぬ。いろいろ作者未詳のもの、子供そのものの声が混入しているにちがいない。グウス夫人の名すらも英国その他の英語本位の国々では忘れられて、子供たちはいわゆるお母さんがちようの謡うただと思つている。読まれるということよりも歌いはやされている。すなわちイギリス民族そのものの童謡となつている。この民衆そのものの歌謡を決して侮つてはならない。

ことにその快活、その機智、その鋭い諷刺ふうし、無邪、諧かいぎやく謔、豊潤な想像、それらのた

ぐいまれな種々相にはさすがに異常な特殊の光が満ちている。むろん、これらの中には純粹な芸術上の立場から見ると、多少の玉石混こんこう淆は免れぬ。しかしこれは民謡としての紹介にはしかたのないものである。だから芸術品として見てもずいぶんいいと思うものがある代わり、ずっと品位の落ちたのも少々はある。それにしてもどうにも棄てるには惜しいなんらかの鋭さが蔵されている。で、私は拾った。ただ無批判に手当たり次第に訳したのではない。これでない「マザア・グウス」の大体がはつきりしないからである。子供というものはそうビクビクして教育しなくともよい。私は子供の叡智えいちを信じている。

私はまたこれらの Nursery Rhymes を訳しながら、洋の東西を問わず子供の感情ないし感覚生活ということについてはほとんどおなじだということに驚かされた。この中の「てんとうむし」のごときは全然日本の「からすからす」の童謡とそっくりではないか。幾つかの「ででむし」の謡うたのごとき、またほとんど同じではないか。

ただ、彼においてはきわめて都会的な軽快味とその縦横無碍むげの機智とにずばぬけている代わり、日本の子守唄のようなほんとしみじみとしたあの人情味には欠けてはいはしまいかと思われる。で、私は日本在来の民謡やそうした子守唄のありがたさをつくづくと顧みた。ただここでは委細の比較は読者にお任せする。

私がこの集に訳出したのは「マザア・グウス」の童謡を主として、なお英米児童の間に行なわれている遊戯唄ねんねこ唄その他のものを取り混ぜた。

翻訳するに当たっては四、五種の童謡集、楽譜等をかれこれ参照した。同一の童謡でもいろいろ歌いくずされたり、抜かしたりしてある。はなはだしいのは肝腎かんじんな個所で全然反対の意に変わっているものもある。そういうのは最もいいと信じたものから選択した。この集の序詩のごときはどの本をのぞいてもとどころどころ抜けていた。で、みんなから綜そうご合ごうしてあのとおりにまとめてしまった。しかしどの聯れんもどの行も私の自儘じまに作り足したのではない、そのままそろえて完全な一つのものとしたのである。

元来、翻訳ということはむずかしい。とりわけ韻文の翻訳は難行である。語学者でもなく、学力も乏しい私が、この難事に身を入れることはかなりはばかられることではあるが、ただ幸いに私は詩を作っている、民謡としての日本のことばをどうにか風味してきた。で、詩とか民謡とかについては、その真精神、そのリズムの動き方等にはまずまず相当の理解を持つているつもりである。で、その力を頼りにともかくやりはじめてみたのであった。

第一の困難は、これらの童謡はむろん手拍子足拍子で歌うべきものであるので、訳もま

たきわめて民謡風の動律で、全然歌うようにしななければならない。で、原謡のリズムの動き方についてはそのとおりそのままの推移法を必要とする。これを違った国のことばで移そうとするのはかなり無理なことである。そしてまた歌えるようにするのはなおさらである。

で、ある少数の例外を除いて、私はなるべく一行ずつほとんど逐次に訳していった。大體において逐次訳といつていい。そのおかげで私は創作以上の苦しみをなめた。

もつとも、一昨年あたり、はじめてこのことに着手した当座はまだ不馴れで、充分手に入らなかつたゆえに、謡いものとするために多少の手加減をしなければ思うように訳せなかつた。それが次第に厳格な逐次訳でどうにか納めていけるようになった。で、この中には少数の手加減を入れた例外がある。

それから、*Rain, rain go to Spain* というような音韻上の引っかけことばのものは訳しようとするのがそもそもの無理であるから訳しなかつた。「雨、雨、スペインへ」では原謡のおもしろみがなくなるからである。日本でなら「雨、雨、安房<sup>あわ</sup>へ」というふうにあの韻で掛けてゆくべきものである。

Baa, Baa, Black Sheep べうべうなのも困った。すべてBでいつているのであるが、日

本の黒羊のくにBは掛からない。かといつて、「くうくう黒羊」でも羊のなき声は出ない。「なけなけ、黒羊」では意味だけのものになる。意味だけのものでは、ほんとうの訳にはならないのだ。しかたがなければその言語のまま生きさせるほかに道がない。

「やぶ医者の方オスタアさんが、グロオスタアへいって」というふうのものはこれもことばの上の引っかけであるが、固有の名詞でそのままやれるから、そのとおりにしておいた。「お医者さまの西庵さいあんさんが埒さいたま玉へいって」というふうのしゃれだ。これは両方が固有名詞でいつてるのでそのままがいいが、雨とスペインのごとく、一つが普通名詞である場合はまったく困ってしまう。で、あるものは「とつびよくりんのチャアレエが」と訳しては原謡の妙味が出ない場合に「とつびよくりんのとん吉が」というふうにとで掛けたものがある。これはとん吉そのものが人名というより、「とつびよくりん」そのものが通称化されているからさして障りさわにはならないし、チャアレエという人名は原謡にはただ音韻上のしゃれに使用したままで、それ以上のものでないから本質的の引っかけの妙味を主として訳したのである。しかしこうした例はこれくらいである。

それからまた、

月の中の人が



ころがつておちて、

北へゆく道で

南へいつて

凝こごえたえんどうじる豌豆汁で

お舌をやいてこオがした。

の原語では「ノルウイツチへいく道をきいて、南へいつて」であるが、ノルウイツチはロンドンの北に当たるので、本質の精神は北へが南と対照して、ノルウイツチを知らない日本の子供にはつきりわかるし、このほうがずっと簡潔でいいからである。こんな場合の地名は除けた。しかし、この例もほかにはめつたにない。たいがい生かすべき固有名詞は生かした。

それからまた、日本語になおす場合に、語法の相違から、動詞の過去を現在格にしたり、そのまま直訳するよりも、かえつてピタと本質的にその意に合う日本語がある場合は、その無意味な直訳は避けた。その真精神にそむくばかりでなく、日本語としても生きないからである。

それから、正直に「うまく返事をしてのけた」と訳したでは、かえってその本当の面目が出ない場合は「うまく返事をしてのきよか」というふうにしたのもある。

それからまた、「二十四人の仕立屋がでむしころしにいきました」を「二十四人の仕立屋がでむしころしにえっさっさ」とやったのもある。意は同じでも、えっさっさのほうが一列に、活動人形そのままになって、足がさくさくとおなじに動くからである。

それからみだりがましくてちよつと困るのは多少気品をよくするために手加減したのがある。

で、こういうのは例外であるけれども、それだからといって充分意識してやっているのだから、詩法を知らぬ語学者から頭ごなしに誤訳呼ばわりをされたくない。

ただ、学力の不足のためか、うっかりしたためにとんでもないまちがいをしたことがあるかもしれない。そうした条々がもしあればどうか御教示にあずかりたく願います。

私はそれらの内容と動律の本質とをわが日本の民謡語であたう限り生かしきろうとつとめた。生かしたなればありがたい。創作するとほとんど同様の誠意と熱心とをこれに傾けたのもこのゆえである。で、ある意味においては半ば私の創作ともいえよう。

以上





## 青空文庫情報

底本：「まごあ・ぐうす」角川文庫、角川書店

1976（昭和51）年5月30日初版発行

1995（平成7）年1月30日24版発行

底本の親本：アルス版全集

1930（昭和5）年

※「\*」は注釈記号です。底本では、直前の文字の右横に、ルビのように付いています。

入力：藤本篤子

校正：八巻美恵

1998年1月21日公開

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# まざあ・ぐうす

北原白秋訳

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>